

『モネ蔵という男』

東北は宮城県。
町外れにあるだだっ広い畑の真ん中に
ポツンと1つだけ
コンクリートのブロック工場があった。

そこは、僕の母が経営していた
ブロック工場だ。

建築資材のコンクリートブロックを製造する
小さな工場。
女性には似つかわしくない
職業である。

母は看護婦をしていたが
僕が生まれた2ヵ月後に
祖父が亡くなると、
祖父の会社であったブロック工場を引き継いだ。

0歳2ヶ月のカワイイ盛りの
息子を置いて
慣れない仕事へ行くのは
本当に嫌だったと、
今でも当時を思い出しては口にする。

父は会社員だったが
休日は母の会社を手伝いに出ている
1週間休みなく働いていた。

そんな家族総出で
365日働いている工場が
僕にとっては大好きな遊び場だった。

コンクリートブロックが
積み木の代わりになり

算数の宿題では
コンクリートブロックが活躍した。

『10 たす 3 は？』

わからなければ
コンクリートブロックだ。
10コと3コ拾ってきて数えてみる。

掛け算も覚えた

『あのコンクリは1コ5円の儲け。3コ売れるといくら儲け？』

数字の計算はコンクリート片手に
いつも父が教えてくれた。

休憩時間になれば
2人の従業員がいつも遊んでくれた。

「コンクリの利益は1コ5円」
「10コ売れるとおやつのせんべい1枚分だな」
これが父の口癖だ。

週末になると
トラックの助手席に乗って
遠くの建設現場に配達だ。

1個売れて5円のブロックを
トラックの荷台に積めるだけ積んで
デコボコ道を進む。

当時はシートベルトの着用義務もなかったので
助手席でポツンと座っているのだが
小さな僕が助手席に座ってもシートがデカイ。

建築現場は道が悪いから
カーブのたびに
右に左に車の中でゴロゴロ転がって
頭をぶつける。

だから、助手席では
いつもヘルメットを被っていた。

工事現場の黄色いヘルメットだ。

そのままだと
ブカブカなので、タオルを頭に巻いてから
被っていた。

いまでも工事現場で黄色のヘルメットを見ると、
当時のことを思い出す。

小学校に入ると月曜日は
朝の朝礼があって、
そこでは、順番に
週末に何をして過ごしたか
発表していく時間があった。

「動物園に行きました。」
「遊園地に行きました。」
「少年野球の試合に出ました。」

次々とクラスメートが楽しそうな週末を
発表していくなかで
僕が言うことはいつも決まっていた。

『母のトラックで工事現場に行きました。』

周りから見たら、
せっかくの土日に
両親の仕事につきあっているなんて
羨ましがられることはなかったけれど

僕は、そんなブロック屋の毎日が楽しかった。

学校の友達と遊ぶよりも
工場に出入りする業者の人に挨拶して
お菓子を貰ったり

コンクリートの積み木でままごとしてたり、
秘密基地を作ったり、とにかく工場が大好きだった。

いまは工場をやっていた母と同じ年齢になった。

改めてその当手を振り返ってみると
父も母も本当によくやってたと思う。

母は看護婦から建設業界に入って
右も左もわからなかつたろうが
毎日事務所に籠って伝票作業をやったり
従業員の昼飯や夜飯まで用意してあげて
本当に頑張ってた。

毎年必ずボーナスも出してたし
慰安旅行も必ず連れて行った。
本当に本当に頑張ってた。

祖父の会社を守ろうと
必死だったんだと心から尊敬する。

しかし、そんな工場も
窮地に襲われた。
僕が小学4年のときである。

月末、
銀行に向かった経理担当が
会社の金を持ち逃げしたのである。

銀行や取引先には事情を説明し
支払いを待ってもらったが

母のブロック屋のような
小さな会社の取引先は
だいたいが同じような規模だ。

相手にも社員がいるし、
待ってくれても2ヵ月が限界だったそうだ。

母は毎日資金繰りに奔走していた。

『本当にすいません。本当にすいません。』

事務所で電話越しに誤っている姿が
いまでも目に焼きついてる。

そんなある日、
学校から帰ると
母が呆然と家の前に立っていた。

いつもは見せない
力の抜けた
ポーっとした表情。

僕を見つけると、
力なく笑いかけてくれたが
いつになく疲れ切った母だった。

僕に近づき、膝を着いて
僕の目線に合わせて

「母さん、ブロック屋 やめてもいいかな？」
「じいちゃんが残した会社、やめてもいいかな？」

今にも泣き出しそうな声で
搾り出すように母が言ったことを覚えている。

子供ながらに
何か大変なことが起こったと感じて
どうしていいのかわからず
うつむく母を見つめているしかなかった。

翌日、看護婦をやめて
カワイイ盛りの
我が子の子育ても諦めて
365日必死に守ってきた祖父の会社が

従業員の裏切りで
あっさりと倒産した。

僕の大好きな場所。

母のブロック工場がなくなった。

工場の倒産後、
家族全員の心に
ポツカリと穴が開いた。

夕方になれば
母が家にいる。

休日になれば
父も母も家にいる。

僕が生まれてから
初めての家族団らん
を経験していたが、

誰もが
「何をしていたかわからない」
そんな状態だった。

それが2年ほど続き、
僕も中学生になった。

ずっと落ち込んでいた母は
臨時の教員として隣町の学校で働き出した。
前を向いて歩こうとしている
母を見ていると

僕もお金を稼ぐという経験がしたいと
中学生ながらに思った。

そこで、中学生でも
何か出来ることはないか？

そう思って探していると、
学校の帰りにいつも通る
近所の朝日新聞が
朝刊配達を募集してるのを見つけた。

僕はすぐに新聞配達を始めた。

朝 4 時 30 分に起きて
新聞屋に行き
自分の配送エリアに
新規で配達する家がないか確認。

確認したら外にあるボロボロのギアなし自転車に
新聞とスポーツ紙、経済紙を積み込んで出発。

これを、週6日。
雨の日も雪の日も。
中1から中3夏まで約2年。
3時間かけて250部を配達していた。

朝起きるのは『慣れ』でなんとかなるが
配達後に授業を受けて
部活をやってとなると
学校との両立は結構キツかった。

それでも、初めて経験する
お金を稼ぐ大変さと、
お金を貰える喜びは

何事にも変えられない経験だった・・・・・・・・

と、言いたいところだが
そんなキレイな話では
終わらない。

それは受験勉強のために
新聞配達をやめる僕の後釜として
高校1年生の加藤君が
入ってきたときのことだ。

1ヶ月間、配達を教えるために
加藤君と一緒に新聞を配り続けて
ついに今日でやめますよ。という当日。

加藤君の一言から衝撃の事実を知った。

『2年も頑張って偉いよね。』

『毎朝配っても5万。』

『高校になったらもっと良いバイトしてね。』

5万?・・・5万??

僕が月々貰っていた給料は2万である。

中学生ながらに
安すぎるとは思ったが、
加藤君の一言で
大きな金額差があることを知った。

同じ仕事をしていて
同じ時間だけ働いているのに
給料に大きな差がある。

こっちは2年もやって2万なのに
加藤君は1ヶ月目で5万。

たった1歳の差で
何なんだこの金額差は。

店に戻ると
真っ先に店長に聞きに行った。

すると、店長は一言。
『中学生だから法律があるんだよ』
それだけ言うと奥の部屋に消えていった。

法律なんていわれても中学生の僕には
よくわからない。

いま大人になってから調べてみると
確かに労働基準法の法律はある。

だがそれは、
義務教育である中学生の労働に関するものであって
給料に関する法律ではない。

そもそも
僕が育ったような
夜になれば街灯もないド田舎で

僕が中学生の時代に
労働基準法なんてガッチリ守ってる
なんて皆無だ。

だが、その当時の僕にはわかる由もなく
もちろん納得はできない。

だけど、法律だと言われれば
わからないから、反論しようがない。

僕と加藤君に差があるのは
年齢が1歳ちがうだけ。

たったこれだけの違いが
2年間の経験や努力を無視して
金額の大小に影響するというのか。

そんな怒りを感じていると
雨の日も雪の日も

毎日新聞配達しながら
学校の両立に頑張っていた
自分を思い出し
何だか虚しく感じてしまった。

さらに、この時期、偶然にも
ブロック屋が倒産した理由を知ることになる。

これまで
父と母は僕に
倒産した理由だけは
ずっと教えてくれなかった。

しかし、思わぬカタチで
倒産の事実を知ることになる。

ある日、学校から帰り
家に一人でいるとき

警察から
『従業員が見つかり逮捕した。』
という電話を受けたのである。

名前を聞いてみると
祖父のときから
長く勤めた従業員だった。

周りからは
「ジーさん」と呼ばれ
慕われていたオジサン。

僕が生まれたときから
いつも優しくしてくれて
休憩時間には常に遊んでくれたジーさん。

祖父の記憶がない僕には
本当の祖父のような人だった。

ジーさんが
急に会社に来なくなって
寂しい思いをしていた僕に

母からは
「家族の事情で急に故郷に帰った」
とだけ聞かされていた。
しかし、本当は違った。

最初は、ただただ驚きと
「何で？」
という気持ちだけが沸いてきたが

中学生になった僕の頭ですぐに
連想ゲームが始まる。

『優しかったあのジーさんがお金を持ち逃げ・・・』

会社が倒産した時期と
ほぼ同じタイミングで
会社のお金を持ち逃げしたジーさん。

それだけが倒産の原因かは
わからなくとも
大きな要因であるとはすぐに想像できた。

会社が倒産して、
母がどれだけ悲しんでたかを
身近で見てきた僕は
沸々と怒りが湧いてきた。

どんな理由があったにせよ
母が守ってきた
祖父の会社が倒産したんだ。

新聞配達の出来事で
同じ仕事をして
世の中は平等じゃないんだなと
感じていたとき、

ジーさんの出来事が
重なったことで、僕は

『どんな大人も金によって狂う。お金は怖い』
『どんなに優しくても大人は信用できない』
『頑張った母も自分も報われない。世の中は平等じゃない。』

という、
成功するために必要な価値観とは
まったく間逆の価値観を持つことになった。

こうして
僕は世間や大人を斜めからしか
見られなくなり

『お金』に対して異常なまでの
『怒り』『恐怖』を抱くようになった。

しかし、先に伝えておく。

多感になる時期に
お金のドラマが重なってしまったことは
不幸かもしれないが

もし、このレポートを
子供を持つ人が見ているなら、
僕は強く言いたい。

子供が持った
お金と大人に対する価値観は
親がしっかり修正してあげてくれ。

それは、お金をたくさん稼ぎなさい
と伝えることではない。

親が立派で優しい大人を演じる
ということでもない。

僕のように、
お金や大人に必要以上に振り回される子供に
しないであげてくれ。
ということだ。

色んな大人がいる。
色んなお金の使い方がある。

これをやったら駄目なのよ。
あーゆー大人になっては駄目。

盗み、詐欺、人殺し。
この社会にはペナルティである
【法律】というルールはある。

しかし、
これをやったら人が喜ぶ
これをやったらお金をもらえる
これをやったら褒められる

そういったボーナス側のルールを教える
環境が全くない。

僕のようにグニヤリと曲がった
価値観を子供のときに持って
成長してしまうと、

価値観を修正できる環境は
ほとんどないのである。

そんな大人にさせないためにも
子供のうちに修正できるのは
親しかいない。

お金に対して持っていい感情は「感謝」だけだ。

怒り、恐怖、執着、妬み、
これらの感情は絶対に持ってはいけない。
修正しなければいけない。

そもそも
お金に感情は無い。
感情を入れてしまうのは人間だ。

お金はただの道具だ。

自分が幸せになる為にお金はある。
誰かを幸せにする為にお金はある。

そのために
『お金を稼ぎたい』ことは素晴らしいことだ。

お金は幸せになるための道具だ。
必要ない感情は入れてはいけないのだ。

今は運よく、起業する立場になり
36歳にしてお金に関しては
今後不安を感じないと確信できるに至るようになった。

そのおかげで
人間的な魅力がある人とも会えるようになった。

僕は、中学生の出来事が邪魔をして
お金の『負の感情』を抱いていたが
実際にお金を持っている人間で
お金の『負の感情』を感じてる人は全くいない。

ゼロである。

そもそも、
起業するということは
価値を人に提供することだ。

人に価値を提供するという
マインドを持つと
人間的な魅力はどんどん増していく。

すると、お金がどんどん回りだし
お金の感謝するようになる。

そういった感謝の気持ちを持つ人と接し、
学ぶことで
僕自身もどんどん変化していった。

お金と時間に余裕が生まれ
人間力もどんどん高くなり
人と接する時間がどんどん濃密になった。

それを繰り返す中で
僕が抱いていたお金への恐怖感は
全て壊され
人に価値を提供する価値観を持つまでになった。

それでも、まだ足りない部分も多いが
人に価値を提供することが
お金と人生に変化を与えるマインドだという考えが
今は明確にある。

話を戻す。

僕は、中学生の出来事から
人を信用できなくなった。

どんなに優しい人でも金に目がくらんで裏切る。
同じ仕事したってどうせ評価してくれないんだろ。

その苦い経験から、僕は、人と関わらずに
「自分で稼げる技術を得て、他人にグダグダ言われたい人生」
これを目指すようになった。

人と関わるという選択を
捨てると、どうなるか？

- ・素直にならずに
- ・集団から孤立し
- ・孤立しても別に構わないと強情になり
- ・周りの人間を馬鹿にする

一人じゃなにもできないくせに
一人で生きていくことだけを考える
幼稚で浅はかな人間の出来上がりである。

まず、素直になれないとどうなるか？
友達や他人が離れていく。

例えば、数少ない友人とマックに行く。
マックでハンバーガーを食べたいが
お金がない。

すると友達が、
バイトの給料が入ったから
オゴってあげると行ってくれる。

普通なら
「え、いいの？ありがとう」
となる話だが・・・

人を信用していないし
お金で優しくされるのは
何だか怖い。

数日したら
「あのときの分、返してね」
なんてサラッと言われそうで恐くなる。

結局、友達には断り、
ハンバーガーを食べる隣で水を飲む。

そんなやつが隣にいたら
友達も迷惑な話である。

他にもある。

高校の体育の授業中、
思いっきり転んで
ジャージの裾が引っかかって
太ももあたりまで破れたことがあった。

見かねた
運動部の友人が
余っているジャージを
貸してあげようと
言ってくれたが

「あとで新品で返してね」

そう言われるんではないかと思って
結局、破れたジャージで過ごした。

これでどんどん孤立していく。
素直に人の親切が受けられない。
こんな例が山程ある。

とにかく
お金をくれる、モノをくれる。
他人がしてくれる優しさを素直に受け取れないのである。

先にも書いたが
起業とは価値を人に提供してこそ成り立つ。

しかし、人から価値を提供されても受けとらず、
喜びや感謝を知らない人間が
どうやって人に価値を提供するというのだ。

僕が、『お金を稼ぐ』ことに対して
どれほど縁遠かったのか、
このエピソードだけでも伝わるのではないか。

素直になれないで
せっかくの親切も
無下にしてしてしまう僕は

友達から見たら

「心を開かない、何考えてるかわからないヤツ」だ。

そんなヤツに楽しい学校生活などない。

僕は高校に入るとあたりまえだが孤立していた。

このままでは良くない。

何か手段を考えなくては。

心が叫んでいたが、

手段は知らない。

高校では影を潜めて存在を消し、

放課後はバイトばかりしていた。

- ・ 深夜の道路清掃
- ・ 海産物屋での倉庫仕分け
- ・ バイク便のドライバー
- ・ 大型トラックのタイヤ付け替え

見てわかるとおり

人との接点は極力持たない裏方のバイトばかり。

『人を信用できないなら人と関わらないほうがいい。』
この思いは相当に根強かったのだ。

お金に負の感情があるのに
お金を稼ごうとしていることに
矛盾を感じるかもしれないが

(友達がいなのはバイトに忙しいから)
(僕はバイトで社会経験して、社会出る準備してる)

バイトすることを【孤独への言い訳】にしたかったのだ。

もちろん、こんなものは
素直になれず孤立している自分の言い訳だと自分でも
わかっていたが、
何とか自分を肯定したくてバイトしていた。

このままではダメだと相変わらず思っていたが
何の手段も見つからず、探す方法も知らずに
悶々とする日々を過ごしていると

最終的には、

(こうなってしまったのはジーさんのせいだ)
(新聞配達での出来事のせいだ)

という、人のせいにするだけの
結論に至ってしまい
やりきれなさから僕の中で、
お金への感情にどんどん怒りが混ざっていった。

中学生のときに新聞配達を始めたきっかけである
お金を稼ぐ経験がしたいという
純粋な感情はもうない。

- ・ 結局、お金を持ってる奴が偉いんだ。
- ・ だったらたくさん稼いでやる。
- ・ 見てろよこのヤロー
- ・ 絶対に金持ちになってやる

簡単に言えばこんな感情が芽生えていた。

高校時代はバイトだけで
あっという間に過ぎた。
学生らしいことなんて1つもしていない。

友達とゲームに明け暮れたとか
恋愛を楽しんだとか
グループデートしたとか
無我夢中でスポーツしたとか
1つもしなかった。

高校を卒業後、
大学受験はしなかった。
就職もしなかった。

「自分で稼げる技術を得て、他人にグダグダ言われたい人生」

そのために、学歴が必要だとは思わなかった。
何となくノリで大学に行くとかバカだと思っていた。

バイトでの稼ぎで十分生活もできるから
学校に縛られる意味はないと思っていた。

かといって、やりたいことも無いし
自分で稼げる技術なんて
イマイチわからないまま
高校の延長でフリーターをしていた。

そして、あっという間に2年が過ぎて
20歳になっていた。

相変わらず友達もいないし、
孤独にバイトしてるだけの日々。

正月も終り、成人式が近づいてくると
母には

「成人式には行きなさいよ」

と言われたが、
行ったところで別に楽しくない。

(ちゃらくて調子に乗ってる大学生が
集まってる式だろ。)

そんなふざけた式に出る時間をもったいない。

しかし、母には「出ない」と言ったものの

「もしかしたら、昔の友人が成人式に誘いに来るかもしれない」

なんて淡い期待を持ってる面倒くさいバカなんで
成人式の日にはバイトを入れずに空けていた。

そして、成人式の日。
今となれば、バイトを入れなかった判断は、正しかった。

僕は、この日に運命的な出会いを果たして
上京し、専門学校に入り、就職を目指すようになる。

それも適当な中小企業とかではなく
有名な一流企業を目指すことになる。

その結果、2年後に
東京で某有名企業に就職することになる。

大人に目を背け
人の親切にも目をそむける
クソ面倒くさいフリーターの僕を
その出会いが救ってくれた。

これは、僕にとって
人生での大きな出会いだった。

成人式の日。

案の定、僕を誘いに来る友人はいなかった。
せめて身だしなみは整えておこうと
近所の床屋に行った帰り道。

見慣れない高級車が、
僕の家の前に停まっていた。

こんなド田舎には似つかわしくない
僕でも知っている超高級外車である。

不思議に思いながらも
玄関を開けて
「ただいまー」と小さく一言。

家の奥から
母が小走りに僕の元へきて
「こっちに来て挨拶なさい」と小さくつぶやく。

いつになく緊張した
面持ちの母の顔を見て
何事か？と僕まで緊張した。

見慣れた短い廊下をゆっくり歩き
刈ったばかりの頭を搔きながら
リビングまでいくと

白髪で初老の男性がソファの横に
正座して僕を迎え入れた。

明らかに高級なスーツを身にまとい
父のオヤジ臭とは違う
上質で気分が悪くならない
微かなオーデオロンの匂いを身にまとった
『上品』という言葉がピッタリの男性だ。

いつも見慣れた我が家のリビングが
ウチには似つかわしくない人間が
正座をして僕の前にいることで
初めてきた場所と思うくらいの錯覚になった。

男性は ずっとうつむいて
肩を小さく揺らし小刻みに震えていた。

．．．．どうやら泣いている。

状況がわからず
困っていると
後ろにいた母も泣き始めた。

3分か5分したただろうか。
やっと落ち着いたようで、
初老の男性がついに顔をあげて

一言、

「本当にすまなかった」

ハッキリした口調で僕に言った。
謝られてもよくわからない僕は
その初老の男性の顔を見ながら即答した。

「え？・・すいません、何のことでしょうか？」

驚く僕としっかり目が合った。
目の前の男性を見て思った。

「僕はこの人を見たことがある」

すぐに脳が
昔の記憶をプレイバックさせた。

そして、目の前の男性と
僕の記憶がリンクした。

この初老の男性はジーさんだ。

ブロック屋の金を持ち逃げして
祖父の会社の倒産の引き金となった
元従業員のジーさんだ。

僕の記憶は
ジーさんの顔と同時に
倒産して母が感じていた無念さや
信じた人に裏切られた辛さを
呼び起こさせた。

僕の怒りが沸点に達するまで
時間はかからなかった。

すぐに怒りの矛先は母にむかった。

「なんで家に上げてんだ。ふざけんな！！」
「金盗まれて、どんだけ辛い思いしたか忘れたのかよ！！」

母は何も言わない。

何も言わない母をみて、
また怒りがこみ上げる。

ジーさんはまた頭を下げてうつむいてる。

僕の怒りの叫びだけが響くなか
2人は何も言わず
ジッと僕の罵声を聞いていた。

「なんとか言えよ！」

それでも何も言わない2人を見て
何だか、僕は泣けてきた。

このときの感情は
悔しいとか悲しいとかじゃない。

『虚しい』だ。

僕はこのとき、はっきりとわかった。
怒りをブチ撒けている僕が
母とジーさんに言いたかったことは

「お前らのせいで俺の人生がおかしくなったんだぞ」

ずっとそう言いたかった。

「人のせいにするな、自分の人生だろ。」
これは正論だ。

だけど、この正論のせいで
本当に自分が思ってることや
素直になって言いたいことがときに言えなくなる。

僕は思う。
何でもかんでも自分のせいではないと。

他人の影響のせいだってことはたくさんあるし
右にならえの教育で
抜け出そうとすると頭を叩いて
平均値に収めようとして

「常識」「正論」という言葉で蓋をされては
本当に素直なことは言えなくなる。

とくに子供るとき
自分で生きていくことが出来ない環境の場合、
環境の責任が問題であることがたくさんある。

友達がいないこと
素直になれないこと
強情なこと
プライドが高いこと
お金の負の感情がること

これだけ見たら
「自分の責任でしょ」
と言われるだけかもしれないが

その環境をみたら、
その子供のせいじゃないことがたくさんある。

「我慢は美学」
昔の大人はそうだったが、本当にそうだろうか？

のびのびした子供を育てたい。
素直な子供を育てたい。

表ではこういって、裏では
我慢は美学だ。これが常識だ。と、
自分の意見も言わせない空気を作る。

こんな二律背反で、
素直な子供なんて出来るわけがない。

だから、僕は、
自分のせいじゃない、環境のせいだ、人のせいだと
はっきり口に出る子供の方がよっぽど素直だと思っている。

話を戻す。

3人で涙を見せている
不思議な状況の成人式の日。

罵声を吐きつかれた僕は
やっとリビングに座り
逮捕されてからの経緯を聞いた。

- ・ お金に困り会社の金に手を付けた
- ・ ブロック屋が倒産したことは数カ月後に知った
- ・ 持ち逃げした資金は全て使った
- ・ 毎日後悔していて、死んで詫びようとも思った
- ・ 収監された刑務所に父と母は何度も面会にきてくれた
- ・ 僕の状況はそのたびに聞いていた
- ・ 出所後、人材派遣の会社をつくった
- ・ 持ち逃げした資金は母に全て返済した
- ・ ずっと僕にも謝りたいと思っていた

出所後もずっと父や母と連絡を取り合っていたなんて僕は何1つ知らない状態だった。

成人式の日、
これまでの過去に向き合って
僕に全てを伝えるには絶好の日だと考えて
ジーさんを家に呼んだのは母だった。

今までの経緯を全て聞いて
やっと落ち着いた僕は

改めて目の前に座る
ジーさんに目を向ける。

ツバを後ろにした小汚い帽子をかぶり
コンクリの汚れいっぱい作業着で
日焼けした顔とコンクリの匂いがする
工場員の雰囲気まる出しの
ジーさんの面影は無くなって

目も前には
一人の成功者としてのジーさんがいた。

この日、母がジーさんを呼んだのは
今のジーさんの姿を僕に見せたかった
というのもあるだろう。

その夜、父が帰宅し、
ジーさんも一緒に食事をした。

その夜は、

二十歳になっても
将来ことなんて関係ないと強がってみても
周りが成長していくことで嫌でも
危機感があるのに

何をやればいいのか？わからないし、
誰にも相談できないから
「なんとかなるだろう」と
自分を誤魔化してずっと生活してきた僕に

社会のことや
自分が経験してきたことの全てを
綺麗事を抜きにしてジーさんが教えてくれた。

この日本の資本主義という世界では
勝ちと負けしかない。

そして、
もし勝ちたいのなら2つしか道は無い。

- ① 圧倒的な技術を身に付けること
- ② 圧倒的な学歴を身に付けること

どちらかを身に付ければ
今からでも友達や同級生には負けないどころか
大差で多くの収入を得ることができる。

そのために今出来ることは、一流大学に行くこと。
大学を卒業していれば社会で感じる不平等な扱いや
自分を否定されることが減る。

資本主義とは
金を持っているやつが勝つ世界だ。
だから学歴なんて関係ない。
という気持ちもわかる。

でも、学歴は大きな武器だ。

よい大学に入る、
たったそれだけで世間からの評価が変わる。
評価が変われば世界が変わるぞ。

学歴ではなく技術を身に付けるならば
目指す業界で一流と言われる企業で学べ。

そこに入れれば、
世間の評価が変わる。

一流の企業に入るにはどうするか？
学歴があれば可能性は広がるぞ。

何もしないで
「なんとかなる」では何もかわらない。
文句を言っても仕方ないんだ。
成人として、自分の道を決めろ。

僕はこの日、上京することを決め、
4月には専門学校へ入った。
最後まで一流大学に入ることを考えたが、

同級生が大卒で社会人をスタートするときに
同じタイミングでスタートラインに立ちたい。

その思いから
ジーさんの言う学歴も大事だと思ったが
僕は技術で勝負しようと決めた。

そして4月になり
20歳で専門学校に入ると、
その時点で僕は同級生よりも2歳年上。

大学なら2浪の新入生もいるだろうが
専門学校で20歳の新入生はいなかった。

成人式のあの日。
ジーさんにあったことで

『どんな大人も金によって狂う。お金は怖い』
『どんなに優しく接されても大人は信用できない』
『頑張った母が報われない。世の中は平等じゃない。』

この価値観を変えるキッカケにはなったが、
何年にも渡り僕の中で宿ってきた価値観は
すぐに変えることが出来るほど
単純なものではなかった。

それでも、人と接することや
親切を受け入れることが少しは
出来るようになり
前よりはかなりマシだった。
専門学校では、友人も出来た。

専門学校では一切バイトをせず、
フリーターのときに貯めた貯金で生活し
ひたすら勉強したり資格を取ったりしていた。

そして、卒業後、
東京の某有名会社に就職することになる。

フラフラしていた僕が
東京でしっかり就職したことに
父も母もジーさんも安堵していた。

しかし、なかなか人生はうまくいかない。
この会社に就職してみると
研修初日から予想してない状況があった。

入社前の3月、
研修日に会社へ入ってみると、
そこで衝撃が走った。

新入社員として僕が配属されたのは
アニメ事業部という
初めて耳にする事業部だった。

アニメには専門学校での専攻も関係ないし、
そもそも就職求人するときには書いてなかった部署でもある。

すぐに上司になる人に確認して見たところ、

「あれ？聞いてないの？大卒の新入社員増やしたから
キミは配属変わったんだよ」

相手は法政大学卒の新入社員だった。

そんな話は聞いてないと不満を言ったら
たった一言。

「じゃ、辞めていいよ。」

もう3月じゃないか。
次の就職先なんて探せねーだろ。
東京でフリーターやってたら、
2年前と同じじゃないか。
大卒を増やすと何で俺が弾かれるんだ？
せっかく就職したのにみんなが泣くな。

正直、パニくったし、辞めようかなと思う自分もいた。

会社側からしたら
専門学校の特攻なんてそんなものないのと同じ。

一流大学卒で入ってきた新人と
専門学校卒で入ってきた新人。
しかも専門卒なのに大卒の新人と同級生。
あなたならどっちを部下にしますか？って話。
そりゃ一流大卒でしょうね。普通なら。

僕はこのとき、ジーさんの話を思い出していた。
「学歴が大事だ。一流大学に行け」

しかし、
いらぬプライドが邪魔して
スタートラインを同級生と同じにしたいという理由から
専門学校を選んだ僕。

このときわかった。
資本主義には“えこひいき”があると。

同じ場所で同じ技術を持っていても
自分の育ってきた環境と選択で
そこには差が生まれる。

専門学校にいった2年後に大卒と
同じスタートラインで勝負だ！

この考え自体が、
資本主義の考えからズレていたのだ。

中学生のときの加藤君を思い出す。
同じ仕事でも高校生と中学生だから差がある。

今回も同じだ。
同じ新卒でも 大卒と専門卒だから差がある。

腹が立つし、悔しくてしょうがないが
ここで辞めたら、昔に戻ってしまう。
悶々とするだけのフリーター生活に。

それだけは絶対にダメだ。

僕は4月からアニメ事業部に入った。
アニメなんて殆ど見ない僕には
夢も希望も無い仕事だ。

さらに、入社してわかったことだが
この仕事は超不規則であった。

会社のどの部署にもないのに
アニメ事業部だけに
仮眠室とシャワー室が用意されてたことに驚いた。

入社3日目には初めての
徹夜仕事が入っていた。

仕事と言っても新人が出来ることなんて何もない。
お客さんにコーヒー入れることと、
あとはおやつと夜食の御用聞きだ。

それ以外は睡魔に負けず
ひたすら寝ないで耐えているだけだ。

慣れない不規則な生活と寝不足で、
ついつい寝落ちてしまうと
頭にカラの灰皿が飛んできた。

『みんな眠いのになんか寝るんじゃねえ』

会社の看板は超立派だが
働く社員を見れば、
どこが一流企業なのか全くわからなかった。

3ヶ月が過ぎたころには
不規則すぎる毎日で
時計の針を見ても
いまが昼なのか夜なのか？
わからなくなる日もあった

そんなとき、先輩がよく言っていた。

「こんな徹夜続きでも、いい経験になるからよ」

徹夜作業が何の経験になるんだ。

コーヒーメーカーからコーヒーを注ぎに行くことが
何の経験になるのだ？

いつくるかわからない仕事のテープ素材を眠ることなく
ジッと待っていることが何の経験になるのだ？

この会社でいったい僕は何をやってるんだろう？
そう思うことも多かった。

この年、
アニメ事業部に入った新入社員は3人。

大卒の2人と僕1人。
もちろん同じ仕事をしている新人の同級生でも
僕と彼らとでは当然給料に差があった。

資本主義はえこひいき。
それはわかっていても
給料が安い側の僕にとっては
腹が立つことに変わりはない。

そんな3人だが、新人のうち
1人は速攻で退職し、もう1人は3ヶ月目に休職届けを出した。

徹夜明け、
唯一の新入社員である僕が
お客さんのカップラーメンの食べ残りを
会社のミニキッチンで処理しているその横を

通常業務の新入社員たちが
談笑しながら会社にくる。

「おはようございます～お疲れ様です～」

この会社に入社が決まったとき
僕はそっち側のイメージしかなかった。
定時に終わらなくても
残業は少なくてアフター5があると思っていた。

しかし、蓋を開ければ

- ・会社に行くときは、必ず替えの下着を持っていく
- ・休日は、次の休みがわからないから寝溜めする
- ・平日に誘われても当然、全て断る。
- ・土日も休めるかわからないから誘われても全て断る。

環境が違うだけで同じ会社でも全てが違う。
精神的に毎日ホント辛かった。

お金を稼ぐのはこんなに大変なのか？
いつも考えていた。

毎日が本当に辛い。同期の新人が
辞めたくなる気持ちも
休職届けだしたくなる気持ちもわかる。

しかし、
それでも僕はひたすら我慢した。

お金を稼ぐというのは
こーゆーことだ。
そう自分に言い聞かせた。

資本主義で勝つために
学歴も技術もないのなら
お金を稼ぐために僕が提供できるのは

時間と
精神と
健康と

全て捧げなければお金はもらえない。

我慢して
毎日いつ終わるかわからない仕事に従事して
その対価にお金を稼ぐしかない。

我慢が美学かどうか？なんて綺麗事はいってられない。
お金をもらうためには
僕には我慢するしかなかった。

休日に専門学校の友人に会うと
「なんでそんなに辛いのに辞めないの？」
「生活なんてバイトでもいいじゃん」
なんて言われることもあった。

こいつらは何もわかってないと思った。

バイトだと、この資本主義では
将来必ず行き詰ることを知らないのだ。
誰でも出来る仕事であるバイトに未来はない。

そんなキツイ日々にも耐えながらも
辞めなかったのは1つ理由があった。

それは
アニメの世界は特殊な業界だったからである。

圧倒的な技術を得るしかない決めて
上京してきた僕は

アニメの世界なら
お金を稼ぐ技術を身につけられるんじゃないかと
考えていたのだ。

しかし、現実はそうではなかった。

会社に入社して6年目。

アニメの世界に入り
ボロ雑巾のように働いてきた中で
それなりの技術もどんどん吸収していたことで

誰もが知っている
有名な作品を担当することになった。

そして、その年。担当した作品が
海外や日本でも数々の賞を取ったのだ。

僕にとっては「自分が作った」
と言える作品だったので
賞をもらえたというのは
初めて技術が認められたと感じた瞬間だった。

よし、この技術でお金を稼いでいける。
そう思ったのだが、

次の日の朝礼で社長の発言から
会社の現実を知ることになる。

「昨日は素晴らしい賞を取れました。おめでとう。」
「これは一重に**営業が努力した結果**です。」
「彼らが素晴らしい仕事を獲得できたから、このような結果になりました。社長賞がありますので今後もさらに頑張りましょう」

耳を疑った。
この賞は営業のおかげだ・・・。

たしかに営業が取ってきたのは事実だが
誰がやっても同じ結果とはならない。

それは、技術職の社員なら誰でもわかっていることだった。

アニメという仕事をしている以上
会社には技術に対しての理解があると思っていたのだが

アニメはあくまでビジネスであり
技術に対する評価の優先順位は
会社の中で一番低いことがわかることになった。

結局、社長賞は営業部だけに渡された。

僕は幻滅した。
どんなに技術があっても
どんなに結果を出しても
それを認めてくれる環境にいないければ
技術は無いのと同じ。

仕事場に戻り
うつむいている僕の横で
上司である 50 歳の課長が
僕に言った。

「仕事なんて こんなもんだよ」

休職や退職者が相次ぎ
気が付くと、僕の上司は
50 歳の課長だけになっていた。

都内にマンションを買って 16 年目。
住宅ローンと、高校と中学の子供を抱えた
家族 4 人の大黒柱である。

他の部署には定時上がりの
同年代の課長もいる中で
いまだ僕と同じような
不規則な仕事を続けている。

しかし、すでに 50 歳。
2 日徹夜とか、
正直かなりキツそうだ。

どれほど頑張ったところで
この会社では評価されないのは
僕へ慰めの言葉を伝えるくらいだから
課長だって気づいているのだろう。

そんな半ば諦めの人生を送る
目の前の課長を見ていて
僕は自分の将来像を見せられてるとしか思えなかった。

これからも

時間と
精神と
健康の

全てを会社に捧げたとして
僕の将来に待っているのは
目の前の課長と同じ未来。

どんなに技術を得ても会社からの評価はない。

僕は、決断した。

ここにおいても
資本主義の世界ではお金を稼げない。
退職しよう。

気が付けば入社からあっという間に
8年間の過ぎ
僕は30歳になっていた。

成人式の日から10年後。
僕は辞表を出した。
精神も肉体も全てが限界だった。

「退職してスッキリしました。」

こんな話を聞いたことあるが、
僕が退職したときに感じたものは
悔しさと自分に対する怒りだった。

10年間、東京で何をやってきたんだろうか。

圧倒的な技術を手に入れて
お金を稼ぐ人間になる

そう決めて
上京して10年。

しかし、現実には
技術を身に付けたところで、
評価すらしてもらえず

ただ毎日、我慢して
不規則な生活を繰り返し
日々の生活費を稼いでるだけ。

なんだったんだ、この10年は。
なんだったんだ、上京するときのあの決意は。
どうなってんだ僕の人生は。

辞表を出してからの日々は
家に帰る電車の中で
ただただ悔しさだけが
沸々と湧き上がる毎日だった。

——— このままでは終われない ———

——— もう一度立ち上がるんだ ———

このまま終わるわけにはいかない。
『この悔しさを絶対に糧にしてやろう』
退職日の帰りの電車でそう決めた。

学歴で勝負が出来ない僕は
再就職したとしても
いまの現状と変わらないのは
専門学校の知り合いの現状を見れば
すぐにわかることだった。

だから、これから先は
会社に就職するのじゃなく、
自分で生きていくしかない。
そう思うのは必然だった。

不安だったが
これまでのような不規則な仕事で
全てを捧げるような働き方では
何も変わらない。

働き方を変えなければいけない。

そう決めてから
「自宅でインターネットで稼ぐ」
という選択をするまでに
時間はかからなかった。

あの決断から 6 年。
僕の月収は 200 万円になった。

2009 年 6 月
退職の数ヶ月前
中吊り広告で見つけた
FX という聞きなれない言葉に
興味を持ち、
すぐに FX を始めていた僕は

インターネットで稼ぐと決めて
その中で漠然と FX で稼ごうと決めていた。

最初は、本を読んで
こんな方法で稼ぐことが出来るのかと
ただただ驚いて興味本位で始めたものだが

学歴もいらないし生活も自分で決めれるから
自宅で稼ぐ方法としてはうってつけだった。

それから、
勝てるようになったのは 2014 年の夏だ。
約 5 年もかかった。

月収で 100 万を超えたのは
さらに 1 年後の 2015 年 6 月だ。

時間はかかったけれど、
圧倒的な技術を手に入れた。

たった一つの圧倒的な技術があると
自宅で座ったままで
高額を稼ぐことができる。

初めて稼げるようになったとき
資本主義でお金を稼ぐとは
こーゆことなんだ、
世界が変わると
こんなに違うのかと驚いた。

一度稼げる経験をしたことで
お金に対する価値観は完全に崩壊した。

我慢をして生活費を稼いでいた
あの社会人の時代は
何だったのかと疑った。

僕が会社員のときの
時給は 500 円くらいだ。

計算するのは恐かったが
昔の明細を引っ張り出して確認した。

それで 100 万稼ぐとなると
2000 時間働かないといけない。

1 ヶ月が 720 時間しかないんだから
会社員じゃ絶対無理な
異次元の月収に到達したなと思った。

その後、
さらなるインターネットビジネスの柱を作った。
それが転売ビジネスだ。

バーコードリーダーというものを使って
近場の店で利益が取れる商品を見つけて
アマゾンで売る。
たったこれだけのビジネス。

こんな簡単なビジネスで
稼げるのか不思議だったが
あっさりと稼げるようになった。

思えば、僕はラッキーだった。
FXで勝てなかった2014年1月。
運命的な出会いをする。

そこでの出会いが
インターネット起業家としての
本当のスタートだった。

そこでの出会いから
ノウハウだけでは勝てないことを知り
全ての本質を学ぶことが出来た。

本質とは
お金を稼ぐ原理である。

その原理は
どんなビジネスでも通用するものであり、
他のビジネスでも共通して通用するものだ。

それを学べば
どんなジャンルの仕事でも
効率と成果に圧倒的な差を生み出せるのだ。

僕はいま、インターネットで
2～3時間ほどの作業で収入を生み出せる。

インターネットは本当に便利で
僕が働かなくても、
代わりに働いてくれている。

風邪をひいて寝込んでしまっても
僕の代わりに稼いでくれるのだ。

インターネットで稼ぐというと
とっつきにくく
何か特別な技術があるのだろうと
思うかもしれないが

僕自身、パソコンでは
アニメに関する特殊スキルはあるが
それ以外はワードとメールが出来る程度だ。

そのことから
稼ぐためには特殊なスキルは必要ない。
そうハッキリ言える。

わからなかったら検索をすれば
大抵のことはわかるし

優秀なツールもたくさんあるから
使い方さえ覚えれば
稼ぐことがどんどん簡単になっている。

僕はジーさんと再会した成人式の日
これから稼ぐためには
圧倒的な学歴か技術が必要だと諭された。

その考えは正しいだと今でも思うが
インターネットがあるいま
稼ぐために圧倒的な学歴は関係なくなったと思ってる。

ただし、資本主義である以上
やはり平等はない。

それは
チャンスが平等じゃないということだ。

僕は退職して稼げるまでの5年間、
生活費を確保する為に無駄な出費は避けて
無料のセミナーや情報商材を得ることしかなかった。

この考えで、だいぶ損をしていたと気が付いたのは稼げるようになってからだ。

僕のマインドは
セミナーや情報を
”無駄な出費”だと思っていた。

しかし、本当のチャンスは
無料のところには無い。

これは断言する。

成功まで短期間で進みたいなら
セミナーやコンサルに投資することだ。

僕はいま、フィットネスジムで
トレーナーから指導を受けているが
プロから指導を受けると
圧倒的に早く成長できることを実感している。

つけたい筋肉の部位を伝えて、
そこを鍛える為のトレーニングプランを組み立ててもらっている。

もしトレーナーにお願いせずに、我流で筋力アップを目指したら
必要ない部位にもついてしまったり、
方法を調べることに時間を取られ
トレーニングをする前に疲れきってしまい
筋力をつけることを諦めてしまったらろう。

FX も同じである。
お金がないからといって
全てを独学で進んできたが
独学はどう考えても
効率的じゃないとわかってしまった。

稼ぎたいなら、
稼ぐまでの時間を短縮して

独学だったなら一人でコツコツ作業してただろう時間を使い
ドンドン稼いだほうが効率的だ。

月収 100 万を稼げるときに

- ・ 独学で 1 年かかかって 100 万稼げるようになった。
- ・ 稼げるまでの期間は月収 10 万だった。

という人と

- ・ 最初にコンサルで 10 万払った
- ・ 3 ヶ月後に月収 100 となり、1 年後も安定している。

という人がいたら

年間の稼ぎはどっちが大きいだろうか。

お金は道具だ。

お金を使えば
自由な時間が増える。

お金を使えば
すべきことに迷わず集中できる。

人間は迷っているときが
一番無駄な時間を過ごしているときなのだ。

一人で考えて、迷っているくらいなら
サッサと人に聞いてしまえばいい。

僕は人との出会いから
運よくインターネット起業で
稼げるようになったが

一歩間違えば
いまでも、徹夜続きの不規則な生活の中で
大卒の人間との差に苛立ち
評価されることの無い仕事で
不満を言いながらも、いまだに

時間
精神
健康

全て捧げて生活をしていたかもしれない。

その姿を想像すると　ゾッとする。

いま世界は明らかに世界が変わろうとしている。

それにより働き方を自分が選択できるようになっている。

これからは格差がどんどん広がって
稼げる個人がどんどん増えるだろう。

僕だけを見ても
2年前は生活に困り果て
縁もゆかりも無い千葉のド田舎に
都落ちしてきた34歳（当時）が

1年後には年収400万
2年後には年収1000万をかるく超えるのだ。

こんな30代がこれから
どんどん出てきても不思議は無い。

僕よりも若い20代の人達や
子育て中の主婦でも
60代の定年を迎えた人達でも
同じような現象はどんどん発生するだろう。

ちなみに、
年収1000万を超えるのは
人口の5%である

1.2 億人の 600 万人ということだ。

普通に会社員で働いていても
この世界に入るのはかなり難しい。

もし会社員のままで、且つ
今も稼げないままにいるならば

これから先、
この資本主義の勝負の世界では
負ける確率が高い。

今までどおりにしていれば
収入が増える時代はもう終わったからだ。

本気で稼ぐんだ。

そう覚悟を決めて
収入を増やすアクションを
起こせなければ
資本主義では、もう勝てない時代だ。

勝てないというのは
もちろんお金を稼げないということだ。

綺麗事抜きにして言うが
この世の中は
ほとんどの問題は
お金で解決することができる。

子供に何かをせがまれても
お金が無ければ買ってあげられない。

外食のとき、
子供が食べたい物が高いなら
他のものを薦めなきゃいけない。

お金がない = 我慢

残念ながら、稼げなければ
この関係はずっと続く。

家族がいれば 我慢するのは
自分だけじゃなく家族も一緒だ。

僕は、
子供に我慢させるときが一番辛かった。

本当に貧乏すぎて
クリスマスプレゼントも買えずに
鶴の折り紙しかあげれなかったときは
僕はなんてクソオヤジなんだと
自分を責めた。

それでも、諦めないで
覚悟を持って行動すれば人は変わる。
そう信じた結果、今がある。

僕は小さい頃の経験が影響して
お金を稼ぐということに
良いマインドは持ってなかった。

ジーさんが
お金を持ち逃げしたことで

お金には人を変えてしまうパワーがある

とずっと思っていたが、

僕自身もそのパワーに
翻弄され続けて
お金に対して
ものすごい執着していたなど
今では感じている。

だからこそわかる。
お金はパワーだ。

それに翻弄されているうちは
いつまでも稼げるようにはならない。

稼ぐための道具として
お金を使えるようになれば

お金を稼ぐことは
さほど難しくない
今なら言える。

今回のこのレポートでは

幼少期が原因でお金に対して
負の感情を持ってしまい、
会社でも評価されずに悔しくて、
退職後も全然稼げなくて、

それでも諦めずにインターネットで起業し、
稼げるようになったことで
全ての価値観が崩壊して、
見える世界が変わり
お金を稼ぐことから精神的に開放され
家族との時間を自由に持てるようになった話をしてきた。

最後に、大事な話をしたい。

僕の人生で、
お金への価値観をグニヤリと
ネジ曲げたのはジーさんが原因だ。

その、ジーさんの話だ。

ジーさんは3年前に亡くなった。
逮捕と同時に離婚していたので
最後は独り身だった。子供もいなかった。
最終学歴は高卒。

資本主義のこの国で
学歴だけで判断され
苦汁の日々を過ごし
ブロック屋の従業員として長年働くも
一瞬の誘惑に負けて逮捕。
前科が付いた。

それまで自分の人生に
関わってきた人達を
一瞬にして裏切ったことに
ひどく後悔していた。

更生して世に出るも
中年の高卒前科者が
本気で人生を変えようと思ったところで
雇ってくれるところがない現実に

さらなる後悔の念と
一瞬の欲に負けた自分への怒りで
人生を棒にふるようになった。

それでも、
人生をやり直すんだと決意して
雇ってくれるところがないなら

「自分で会社をやるしか道は無い」
そう決めて会社をつくった。

このときの会社の資金は 10 万円だった。

最初は誰も相手にしてくれなかった。

そりゃそうだよな。
人生甘くないよな。
人生は厳しいし、世の中は冷たいな。

何度もくじけた。

それでも、いま頑張らなきゃ
俺の人生は本当に終りだと思って
どうやったら稼げるか？必死に考えた。

その中で、
『自分が稼ぐためにはどうすればいいか？
というマインドでは稼げない。
誰も相手にしてくれない。』

そこに行きついて
出した答えが

『相手が稼げるように手助けしよう』だった。

そこに気が付くことができたから、
適材適所に人材派遣すれば
みんなに喜ばれると思って、
建築専門の人材派遣を始めた。

そして、成功した。

ジーさんは高級車や
身だしなみにはお金を使ったが
それは礼儀の為だと言っていた。

それ以外では
自分のためには全くお金に手を付けなかった。

外食もしないし、住んでるところも
普通の賃貸マンション 1LDK に一人暮らし。

晩年は会社を譲ってお金も入ったが
それもすべて寄付をした。

そのジーさんが
いつも僕に行っていた言葉がある

「**中年の高卒で前科あり**。こんな俺が会社作って成功できた。
俺より育ちも学歴も良い奴が成功できないはずがない。」

「若いうちに成功しろ。ジジイになって金持っても使い道は無い。」

今となっては
ジーさんに何の恨みもない。

ジーさんおかげで
東京にも出る決意ができたし
僕が成功に至るまでに
大きな影響を与えてくれた。

しかし、
もし今でも僕が極貧だったら
ジーさんを恨んでいたかもしれない。

「お金なんて無くても幸せだ」

どこかで、そう思ってしまっていたら、
自分のダメさを人のせいにして素直になれず
言い訳ばかりの人生を歩んでいたかもしれない。

そうならないために 僕は素直に認めた

お金が欲しい。
お金を稼ぎたい。
家族をお金で幸せにしたい

ただ素直に心から思った。

お金を稼ぐにはどうしたらいいのか？
それはジーさんが見せてくれた。

人に何も提供しないで、
人から奪う。盗む。搾取する。
それは最低で卑劣な行為だ。必ず後悔する。

お金を稼ぐとは
人に価値を提供することだ。
感謝されることだ。

- ・ 自分に知識をつける
- ・ 学歴をつける
- ・ 技術を持つ
- ・ 仕事して経験を得る

すべては人に価値を提供し
お金を稼ぐためだ。

うまく行かないときがあっても
ムリに自分を大きく見せようとか
カッコつけたりする必要はない。

そんなことをするから
ムダに時間がかかってしまう。

- ・ お金を稼ぎたい
- ・ 人、社会に認められたい
- ・ 結果が欲しい
- ・ 学歴が欲しい
- ・ モテたい
- ・ 子供に何でも買ってやりたい。

素直に自分を認めれば良いのだ。
そして、つまずいても
そのための努力をすればいいのだ。

自分を認めて、素直に欲求を口にして
そのためにお金や時間を使えばいいのだ。

お金があるだけで
子供たちの喜ぶ顔が見られるし
子供たちの将来の可能性も拡げられる

お金があるだけで
成功している人との新たな出会いもあるし
効率的にお金を稼ぐ知識を増やせる。

それを読者のみなさんにも
絶対に体感して欲しい。

今回のレポートは、
僕の正直な想いを全て書いた。

いつかは過去と向き合うときが
必要だなと思っていたが
できれば、ずっと先延ばしにして
向き合いたくないという気持ちもあった。

今回のレポートも書き始めてから
何度も書き直し、読み返し
あーでもない、こーでもないと
結局、2週間以上かかった。

だが、それでも

小学生でブロック屋が倒産して感じた、
悲しくて悲しくて仕方がない気持ちや
お金に翻弄された大人への怒りや
学歴にコンプレックスを抱え持った感情

その全てに、
素直に向き合う良い機会になった。

最後に
このレポート読んでくれたあなたが

僕のように、
全てがうまく行かない、怒りや悔しさで
発狂しそうな負の世界にいるとしても

そこから抜け出して
自分の感情に嘘をつかず
素直になり
成功すると覚悟をして
欲しい物をつかむ

そんな素晴らしい世界で
この先を生きてくれることを
心から願うばかりである。

ここまで、
こんなに長いレポートを最後まで読んで頂いた
読者のみなさんに心から感謝したい。

本当に嬉しい。
本当にありがとうございました。

心から 心から あなたに感謝いたします。

感想はいつでもお待ちしておりますので
ぜひ、思ったことを教えていただければ嬉しいです。

月収 200 万稼いでる
モネ蔵のメールマガジンは↓から登録できます。

[メルマガ登録はコチラ](#)